

## 2023年度自己評価結果公表シート

### 本園の教育目標

キリスト教信仰に基づき、幼児一人ひとりを大切に親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。  
(施設の目的及び運営方針)

第2条 この幼稚園は、幼稚園型認定こども園であって、「日本基督教団信仰告白」に言い表されたキリスト教信仰に基づき、学校教育法第22条及び第23条に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

2 本園は、社会の期待や願いに応えられる創意と活力のある保育活動をすすめ、園児・保護者・地域に信頼されるよう努めるものとする。

3 本園は、安心・安定した情緒と落ち着いた保育環境の中で、健やかで豊かな心と体が育つよう保育を行うものとする。

4 本園は、子育て支援と対話・相談を大切にし、親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

神様の守りと導きの中で、共に生かされていることを感謝し、喜びと祈りを持って保育に携わる。

一人ひとりの見とりを丁寧に行い、興味や資質、友達関係、遊びの具体的な姿を保育者間で共有し、願いに基づいた保育計画をしっかりと立て実践し反省し見直していくことを常とする。“縦割り構成の自由保育”には高度な配慮と保育者の資質が求められるが、保育者自身も学び、自己研鑽を積み、成長する保育者集団として、子どもが主役の保育を創り出せるよう努める。

#### 1. 新型コロナウイルス感染症5類への移行と新体制の中で

5月8日より、新型コロナウイルス感染症法上の位置づけが、2類から5類へと移行となった今年度は、平時に行う感染症対策として、コロナ禍前の【外遊びを大切に生活】【マスクは着用しない(個人の判断)】【健康観察(幼児ぐみの検温表提出はなし)】【換気と手洗いの継続】に戻る形で一年間を過ごした。流行時には必要な対策を講じることを保護者に知らせてあったが、3学期には、4日間、日中の保育後の希望保育の受け入れを休止し預かり保育のみを実施する対応を講じた。保護者の方々のあたたかいご理解とご協力をいただき、この時期を乗り越えた。

また、園長が交代し、新しく5人の職員を迎え新体制がスタートした。3年間続いたコロナ後の新しい幼稚園生活を、目の前の子どもたちが生き生きと生きる場・成長する場とするべく、全職員で取り組んだ。

#### 2. 保育の充実にむけて

ア、信仰を原点とし、聖書のメッセージを聞き祈りながら、園の根底である一人ひとりの存在を尊ぶ「キリスト教保育」への理解を深め保育にあたった。年間指導計画をもとに、月の主題・聖句・願いを決め、教師会で共有した。

イ、縦割り自由保育においては、複数担任制で今年度も保育にあたった。

保育者自身がより主体的に子どもを見つめ関わり、そこで得た豊かな気づきを共有しながら計

画をたて実践していくことを念頭に日々保育を積み重ねた。子ども一人ひとりの育ちについて“みとり”を共有し保育を考え合う週案会では、個々の子どもの姿や保育の反省・次週への展望などを出し合い、計画をたてることが出来、有効であった。一方で、質の良い保育の構築の為には意見を出し合い深め考え合う時間が必要だということも大きく感じる事となった。保育業務は多岐にわたるが、時間を上手に捻出して、ゆたかな保育をチームで創っていきけるよう工夫していきたい。

ウ、「子どもは遊びの中で育つ」ことを大切に、本年も、子ども自身が遊びに出会い遊び込んでいく時間をできる限り確保し、一斉の活動などで遊びが一度中断したとしても、遊びが再開できることや今日の遊びの続きが明日も出来るということを可能な限り保障していく配慮を行った。

保育者は子どもの興味や遊び方、成長への願いなどを加味して、刺激となる遊びの提案や環境を積極的に整えていくことを保育者間の共通理解として日々保育にあたった。

遊び込む子どもたちの姿が随所で見られた一方、年々、散歩などの経験も減り、子どもたちの体力や運動能力が低下していること、また、室内遊びや製作活動についても課題があるので次年度の課題として取り組んでいきたい。

年間を通し、自己実現、自己肯定感の育ち、意見の衝突、他者の思いや存在を受け入れること、協働の遊びの姿など、幼児期に育つ大切さを謳われている非認知能力の育ちが豊かに育まれていることを感じた。

エ、行事については、新規の職員が複数いる事やコロナ禍以前の旭の保育を経験していない職員もいる為、願いや一つひとつの活動の意味合いを理解し共通の思いで子どもに向き合えるよう、時間をかけて計画し準備し実施した。

特に年長児の夏期保育（お泊り保育）では、4年ぶりに妙高高原での2泊3日の夏期保育を実施したが、天候にも恵まれ、保護者やロッジの方々からご協力のいただき、計画していたプログラムをすべて行い、大変中身の濃い豊かな3日間を過ごすことが出来た。

運動会では、4年ぶりに全園児での運動会を実施した。懸案であった駐車場については、近隣の施設のご協力をいただき、駐車スペースを確保し、事前の申し込みを受け割り振りをするなどした。年間を通してすべての計画した行事を実施し、豊かな経験を積み重ねた。

オ、子どもの情操教育の一環として、ヴォルーナトリオの皆さんによるコンサートを保育の中で開催した。生の楽器の音色に触れる良い機会となり、音楽の世界に引き込まれ、心を弾ませる多くの子どもたちの姿があった。コンサート終了後には、自分たちでコンサートごっこを始める姿もあった。

また、母の会有志（親子読書クラブ）による絵本の読み聞かせを年に2回行った。母たちの創意工夫した読み聞かせはとても楽しく、絵本の世界を身近に感じる嬉しい時となった。

カ、年々利用が増えている預かり保育の時間帯については、長時間の保育時間になる子どもも多いことから、より家庭的な保育を預かりの時間に提供できるように配慮した。特に低年齢児の預かり保育利用者が増加していることもあり、シフトを工夫して大人の人数を多く配置し、安全で楽しい夕方の時間を過ごせるよう努めた。

キ、2歳児教育・保育（クローバーの部屋）では、個人差が大きく、育ちの葛藤をくぐり抜けて自立の芽生えが育つ成長過程の子ども一人ひとりに対してより添った丁寧な保育が行われた。今年度も教育利用（認定外こどもと満3歳になった1号こども）と保育利用（3号認定こども）合わせて27名という過去最多の保育人数となったが、第5保育室・第6保育室と隣の第4

保育室の3部屋を使って、広くなった保育室をパーテーションなどで必要に応じて空間を分け、様々な子どもたちの成長に対応する保育を心掛けた。

積極的に毎日戸外に出る活動をする、手指を動かす製作活動・リズム感や一体感・情緒が育まれる表現活動など歴代のクローバーで培ってきた2歳児教育の活動をバランスよく取り入れ、子ども一人ひとりの自己肯定感・友だちと一緒に心地よさの体感・遊ぶ力の育成に努め豊かな成長の場となった。

ク、ブログの発信は基本的に毎日行い、子どもたちの遊びの様子とともに園の子ども観・保育観を発信する手立てとなった。同様に、園だよりやクラスだよりでも子どもの育ちあう姿を発信した。

ケ、外部機関との連携

子どもの育ちを多角的に援助するため、様々な教育機関や医療機関や事業所等との連絡を密にして、共有し、保育に生かせるよう支援会議などに積極的に参加した。

また、今年度も、3学期には、卒園を控えた年長児が、社会見学として、近くの小学校に学校探検に行くなど、地元の小学校との連携も大切に活動を行い、有意義な時間となった。

コ、保護者との連携

4月のはじめに保護者会を開催し、園の保育の基本方針や今年度の行事などについて説明を行った。年2回行っている保育参加は、5月は指定した時間の参加、2月はコロナ禍前の形に近い自由に時間が選べる保育参加を行い、好評であった。保育参加を通し、子ども理解幼稚園理解に繋がっていくと感じた。

2月に東京で行われた全日本私立幼稚園PTA連合会の懇談会・研修会には、園長と共に、長野県の代表として2名の保護者が出席をして下さった。

また、初の試みとして1月に園主催の保護者向けの食育講座を開催した。

一年間を通して、保護者の方からのご理解と信頼、ご協力をいただいたことを感謝したい。

### 3、設備・遊具と安全、環境への対応について

ア、毎朝の保育者による安全点検の他に、外部の専門業者に依頼して、園庭遊具の安全点検を行った。必要なアドバイスをいただいたので、今後の園庭整備の課題としていきたい。

イ、夏休み中に、職員室外壁部分の木板塗装工事を行った。

ウ、春休み中に、幼児ぐみのトイレを和式トイレから洋式トイレにかえる工事を行った。

エ、同じく春休み中に、職員室の改装工事を行った。

オ、預かり保育・給食の申し込みなどの保護者負担軽減のために、ICT化の導入を決め、来年度の1学期中の導入を目指して準備を始めた。

カ、園庭フェンス設置や110番通報装置の設置については検討をすすめたが、諸事情により今年度は実施が出来なかった。次年度以降の課題としたい。

キ、今年度も、火災・地震による避難訓練だけではなく、大規模災害を想定した保護者に迎えに来ていただく“引き取り訓練”を行った。また、2階からの避難や予告なしの訓練など、様々な場面を想定し訓練を行った。消防士の指導のもと、消火訓練通報訓練も行った。一方で、1月に令和6年度の能登半島地震の後には、報道などの影響もあり恐怖を覚える子どももいたので配慮しながら訓練を行った。

ク、子どもたちの生活の場としてのSDGsの取り組みをスタートした。給食室の職員が中心となって、毎日の野菜くずや給食の食べ残しを様々なコンポスト容器を使って、土に返し、花壇などで再利用する試みを始めた。園庭や門の入口の花壇・建物内の植木鉢などいろんな場所で堆肥によって育った花々が愛らしく咲き、環境設定の一端を担った。また、3学期には堆肥を使い庭で育てたブロッコリーを茹で“お店屋さんごっこ”でいただく嬉しい時間もあった。

#### 4. 子育て支援、家庭支援体制

子育て支援として行っている「こひつじ広場」は、好評を得て、今年度も楽しい活動を提供した。例年同様に教育的効果を考え満1歳～2歳、2歳～就園前と2グループに分けて内容を計画して保育を行い、また、例年参加者が殺到する活動については、人数を決め予約制として、密にならない活動が出来るように配慮をした。1～3歳まで参加出来る「園開放」は、年に2回、楽しいテーマを掲げ開催した。

#### 5. 保育者の質の向上、園内研修の充実へ

ア、自分の部屋のこどもだけ”“目の前にいる子どもだけ”見ているのではなく、全体を見通す力をつけていこうということと、全員で全員の子どもをみるということは、誰かにやってもらおうのではなく、どの子どもに対しても一人ひとりの保育者が責任をもってしっかり関わるということで、自分が行動する、気付いたら発信する、自分が出来ない状況にあるならば、同僚に的確な説明をして託す、誰にでもわかる明確な言葉を用いて「報連相」をすることを共有し合った。

イ、園内で起きた怪我やヒヤリハットなどについても、報告し合うだけでなく、なぜ起きたのか、何が足りなかったのか、どうすれば次は防げるのか等沢山考えて話し合う時間をとった。この研修をしてから、子どもの姿の見とり・行動の予測により心を向けようとする保育者が増え、その結果、安全面はもちろんのこと、子どもの今を捉えた環境や経験を準備していく保育へと繋がっていった。

ウ、園内研修は、「旭の保育」「アレルギー」「虐待」等々テーマを決めて研修を行った。ランダムな小さなグループに分かれて意見を出し合う、付箋を使って書いて紹介するなど、参加した職員が気負わずに、そして主体的に参加できる研修のあり方を昨年に引き続いて工夫した。お互いの思いを知り大切な事を共有する良い学びの時となった。

シフトや多様な業務で必要最低限のコミュニケーションになりがちな日常であるが、職員1人ひとりの持てる力を十分に発揮していくためにも、保育者同士が打ち解けあい心と言葉を通い合わすことの大切さを感じた。参加型の研修を工夫していくことで保育の質もモチベーションも上がると感じたので、次年度以降も、時間を作り保育者が主体的になれる園内研修を重ねていきたい。

また、今年度より作成が義務づけられたマニュアルについては、「食事」「不審者対応」「災害時」「119番対応」「重大事故防止」「午睡」「バス送迎」「プール・水遊び」「園外活動」について作成し、同じく作成した「事業継続計画」と共に職員間で学び合い、基本的な行動の指針を確認し合った。

オ、多くの保育者がキャリアアップ研修を中心とした各種研修に参加し学び、教師会で内容の理解・共有に努めた。